



校歌

作詞 寺田 彰司

曲 旧制一高寮歌

「アムール川」

一 千秋の雪積もりたる
富士の高嶺の雄姿ぞ
幾万代の後までも
変わらぬ誠の鑑なる

二 奔流百里石をかみ
巖に激しいや増しに
勢加わる利根の水
これ剛健のためしなり

三 あ、此の山と此の川と
日夕眺むる健男児
自然の示す巨人をば
如何に学ばん習わなん

四 白幡台の雪月花
四季の折々常総の
平野にしるく輝くは
高潔無垢の別天地

五 石段登る六十余
一足ごとに踏みかため
心を鍛え身を練りて
忠良有為の基たてん



編集後記	20
生活体験発表大会	20
進路ガイダンス	20
定時制保健講話	20
部活動状況	19
P.T.A主催講演会	19
進路状況	18
医療への貢献	17
熊谷高校同窓会訪問記	17
トピック②	16
トピック①	14
母校と私の人生	12
母校の想い出	7
同窓会便り	4
平成30年度総会案内	4
平成29年度総会報告	3
校長挨拶	2
会長挨拶	2

竜ヶ崎第一高等学校内
白幡同窓会事務局

〒301-0844 龍ヶ崎市平畑 248
 TEL 0297-62-2146 FAX 0297-62-9830
 ホームページ <http://www.shirahata.sakura.ne.jp>
 メールアドレス shirahatadousoukai@gmail.com
 印刷所：倉沢印刷(株) 題字：秋山海堂(中21)
 表紙写真：野球全校応援 J:COM スタジアム土浦 7月17日 (対土浦三高)

ご挨拶



白幡同窓会会長
梁谷 信洋

白幡同窓会会員の皆様にはご健勝にてご活躍のこととお喜び申し上げます。

日頃本会並びに母校の充実発展のために深いご理解とご支援を賜り心から感謝申し上げます。

本年は四月八日(土)に同窓会総会を開催しました。今回も在校生の吹奏楽部による演奏と応援団及びチアリーダーのエネルギーを盛り上げていただきました。皆さんには厚く御礼を申し上げます。

総会においては招待学年の出席者に陶芸家植竹敏氏(高二十七回)作製の校章入り湯呑をお贈りしました。さらに今回から七十歳以上の出席者の方々にも湯呑を記念品として進呈しました。なお今回は植竹氏も総会に出席してくれましたので、皆さんに紹介しました。

同窓会の活動状況ですが、

校外幹事が増えましたので、委員会組織にして活動することにしました。

①ホームページ委員会②会報委員会③白龍祭委員会の三つです。もちろん重複活動も可です。

六月の白龍祭に今年もポロシャツを作製して有志が同窓会のアピールにとめましました。若い同窓会会員がたくさん参加して活動してくれました。嬉しいかぎりです。

七月には関東大会以上に出場する選手諸君に「奨励金」を贈呈しました。関東、全国に加え、国体にも出る選手がいることを嬉しく思います。

そして愛媛国体に出場した高木薫選手は射撃のビームピストル部門で、見事大会新で優勝を飾りました。新聞に大見出しで「竜ヶ崎一高」の文字が躍っているのを見て本当に感動しました。

また、今年も野球部が夏の大会で活躍してくれました。私たちも同窓会ポロシャツで応援に参加しました。鮭川校長先生もマイトラランペットで応援を盛り上げていました。選手諸君は文武両道を体現して大いにがんばってくれました。

第一シードの明秀日立高を延長の末に破り、昨年に続きベストエイトに進出しました。準々決勝では、結果的に甲子園出場を決めた土浦日大高に惜敗しましたが、古豪竜ヶ崎一高の存在を十分にアピールしてくれた夏でした。

ご挨拶



校長
鮭川 光義

不易と流行について

会員の皆様には日頃より、本校の教育活動に對しまして、格別のご支援とご理解を賜っておりますことに学校を代表いたしました。あらためて感謝申し上げます。本校は三年後には開校一二〇周年を迎えようとしております。これまでの本校の歩んできた歴史と伝統を後ろ盾に、次の時代も大いに社会に貢献できる人材育成を目指し教育活動を

八月末、今年には埼玉県の熊谷高校の同窓会を訪問して活動状況を伺ってきました。さすが伝統校、重厚な活動を展開していました。

対応してくださった武内道郎校長先生、長野順一事務局長さんには心から感謝申し上げます。

校門をくぐった右手に百二十周年記念の句碑がありました。「質実の窓若き日の夏木立」卒業生金子兜太氏の展開しております。

さらには、文科科学省より指定を受け早四年目を迎えているスーパーサイエンス事業もいよいよよまとめの時期に入ってきております。「協働的探究活動によるたくましい科学系人材育成のカリキュラム開発」という研究開発課題の下、これからのグローバル社会において、今後の日本を担え、牽引車となりうる資質や能力の備えた人材育成に向け、日々多様な実践を重ねております。この間、多くの事業に對しまして保護者、地域、同窓会から大きなご支援とご協力をいただき事業も順調に推移し、生徒、卒業生にも一定の効果が見えてきたところであります。

作です。中三十八回卒だそうですが、昨年の創立百二十周年記念式典ではお元気に基調講演をなさったそうです。

わが竜ヶ崎一高もいよいよ創立百二十周年に向けて動き出そうとしています。具体的になりましたら、ご支援ご協力のごほうろしくお願いいたします。

会員の皆様のみますのでご多幸とご活躍をご祈念申し上げます。ご挨拶いたします。

目を社会全体に移してみると、現在、我が国の高校生を取り巻く環境は一段と不透明さを増すばかりであります。高度成長以降の日本においては、未来がある程度予測できる時代でありました。しかし昨今叫ばれている、少子高齢化、人口問題、高度情報化、グローバル化の波は、これまでの物差しが役に立たない時代へと変えてきています。そのような変化の激しい、将来の変化を予測することが困難な時代に、生徒一人一人が自らの可能性を最大限に発揮し、よりよい社会と幸福な人生を自ら作り出していける教育の実現を目指した取り組みを一層進めていくことが今後の教育の課題と考えます。

先に公表された「高大接続システム改革会議」の最終報告では、このような先行きの不透明な時代であるからこそ、多様な人々と協力しながら主体性を持って人生を切り開いていく力が重要になり、それには知識の量だけでなく、混沌とした状況の中に問題を発見し、答えを生み出し、新たな価値を創造していくための資質や能力が重要であるとも述べられています。

教育においては、どんなに社会が変化しようとも、時代を超えて変わらない価値(不易)があります。さらに、教育は同時に社会の変化に無関係であってはなりません。そして、時代の変化とともに変えていく必要があるもの(流行)に柔軟に対応していかなければならぬこともまた、教育に課せられた課題と考えます。時代がどのように変化しようとも、常に不易と流行のバランスがとれ、生徒一人一人が輝ける学校でありたいと考えています。新しい時代へ踏み出そうとしている本校へ、同窓会の皆様の更なるご支援とご協力をお願いいたします。ご挨拶とさせていただきます。

総会報告

平成二十九年度の白幡同窓会総会が四月八日に竜一高体育館で開催されました。開会の言葉に続いて、応援団とチアリーダーによる校歌と応援歌の斉唱。そして恒例となった吹奏楽部による演奏披露がありました。出席者はアイガーデン下平での懇親会を含めて百三十余名でした。今年度の招待学年は高校二十回、三十五回、五十回、六十回と定時制十六回、三十一回、四十六回、五十六回でした。審議・報告事項は次の通りです。

- 一 平成二十八年度事業報告・決算報告
 - 二 平成二十八年度会計監査報告
 - 三 役員改選
 - 四 平成二十九年度事業案・予算案
 - ※総会招待学年に、卒業六十一年の学年が追加承認されました。
 - 五 学校概況報告(進路・部活動)
- 【本部役員】
- 会長 染谷 信洋 (高15)
 - 副会長 小倉 培夫 (高20)
 - 副会長 関口 広行 (高26)

平成28年度白幡同窓会収支決算書

収入総額 10,316,174円 支出総額 4,717,500円 差引残額 5,598,674円 (次年度へ繰越)

科目	本年度予算額	本年度決算額	比較		摘要
			増	減	
1 繰越金	5,369,284	5,369,284			平成27年度より繰越 内訳 定期③ 1,254,393円 水戸信用金庫 会計用 4,114,891円 常備銀行(普)
2 入会金	1,788,000	1,776,000		12,000	全日制 6,000円×278名= 1,668,000円 定時制 6,000円×(15+3)名= 108,000円
3 協力金	2,900,000	2,966,776	66,776		ゆうちょ銀行扱い分(28.37~29.3.6) 632件 1,298,776円 コンビニエンスストア入金分(28.3.7~29.3.6) 832件 1,664,000円学校へ持参 4,000円
4 雑収入	1,716	204,114		202,398	高9回卒橋本忠一様(3,000円)寄付、高8回卒一同 (40,000円)寄付、高15回卒一同(50,000円)寄付 高30回卒一同(32,117円)寄付 定期預金利息 266円、普通預金利息 31円 記念誌販売 9,600円、名簿販売代 27,000円 同窓会名簿販売協力金 42,100円
	10,059,000	10,316,174		257,174	

科目	本年度予算額	本年度決算額	比較		摘要
			増	減	
1 事務費	810,000	574,902		235,098	
1 消耗品費	10,000	1,080		8,920	定期残高証明書
2 支払手数料	200,000	188,127		11,873	ゆうちょ銀行扱い分(28.3.7~29.3.6) 手数料 73,820円 コンビニエンスストア入金分(28.3.7~29.3.6) 手数料 114,307円
3 印刷通信費	300,000	293,553		6,447	総会案内用往復葉書・宛名ラベル代等
4 広報費	200,000	5,142		194,858	ホームページレンタルサーバー利用料
5 旅費交通費	100,000	87,000		13,000	役員会交通費
2 事業費	5,100,000	4,138,926		961,074	
1 総会費	200,000	87,508		112,492	総会経費補助
2 会報発行費	2,500,000	2,387,921		112,079	会報28号印刷代(596,700円)、 会報郵送代(1,791,221円)
3 会議費	200,000	126,654		73,346	役員会等経費
4 招待学年記念品費	500,000	373,740		126,260	招待学年記念品代(湯呑み 311個)
5 記念品費	200,000	161,865		38,135	卒業記念品代(卒業証書ファイル)
6 部活動奨励金等	1,000,000	525,000		475,000	※20,000円+5,000円×出場人数(10万円限度) 関東(陸上部、射撃部、ソフトテニス、水泳) 全国(射撃)
7 学校行事補助	300,000	276,238		23,762	S・S・H関連事業経費、高大連携経費 つくばG7シボジウム経費
8 国際交流基金	200,000	200,000			国際交流補助(26年度~28年度)
3 慶弔費	350,000	0		350,000	
4 基金積立金	0	0			白龍祭参加経費(検便代)
5 予備費	3,799,000	3,672			
計	1,0059,000	4717,500		5,341,500	

- 【校外幹事】
- 幹事長 倉持 正男 (高27)
 - 副幹事長 小嶋 豊 (高10)
 - 副会長 大和佐知雄 (高28)
 - 監事 宮本 正俊 (高10)
 - 監事 山田 實 (高26)
 - 顧問 野口武太郎 (中40)
 - 顧問 齋藤 佳郎 (高8)
 - 顧問 横須賀英明 (高10)

- 幹事
- 副幹事長 木野内昭治 (高13)
 - 服部 俊夫 (高25)
 - 篠塚 文男 (高28)
 - 横田 久 (高28)
 - 櫻井 篤美 (高29)
 - 赤塚 誠 (高30)
 - 大野 雅之 (高30)
 - 大野 雅彦 (高31)
 - 大野 雅彦 (高31)
 - 小嶋 吉浩 (高31)
 - 福田 道義 (高31)

※校内幹事は十四名です。

- 本田 仁子 (高31)
- 山崎 睦 (高31)
- 宮本 順紀 (高32)
- 有川 保 (高33)
- 霜村 裕通 (高33)
- 磯山 佳美 (高34)
- 海田磨起代 (高36)

平成30年度 総会の案内

平成30年度の総会は4月14日(土)に竜一高体育館にて開催予定です。今回ご案内の往復葉書を差し上げるのは、各卒業回の幹事の方々と、招待学年の高校11回・21回・36回・51回・61回及び定時制7回・17回・32回・47回・57回の卒業生全員です。お誘い合わせの上、多数の同窓生の参加をお待ちしています。

なお、招待学年の出席者の方には、陶芸家・植竹敏氏(高27回)作製のオリジナル校章入りの「白萩釉鍋湯呑」を記念品として贈呈いたします。

招待学年以外の方の参加も歓迎いたします。参加いただける方は事務局までご連絡ください。

総会終了後には、例年通り懇親会を竜一高下のアイガーデン下平で開催する予定です。

同窓会便り

高校第十回

滝沢 宣子



五月二十八日喜寿の同窓会を「アイガーデン下平」で開催しました。一時間位前に集まり、新しい竜一高の校舎・校庭を見学しました。講堂で、ある年予餞会に落語家の古今亭志ん生が招かれ、一度聴くことが出来たのです。粋な計らいでした。雨天体操場があつて、新入生の時、生徒会役員の先輩から、校歌伝授の洗礼を受けたこと。剣道の竹刀で「声が小さい!」と何度も歌わされたこと。怖かったです。十二時から「下平」二階の会場に戻り同窓会が開かれました。先ず最初に逝去された方々への御霊に全員で黙禱をささげました。

海老原龍夫さんの開会宣言と経過報告、本橋利久男さんより幹事代表挨拶、鈴木タミさんが乾杯の音頭をとり、五人の小さいテーブル毎に歓談に入りました。

恩師全員に案内状を送りましたが皆様高齢のため参加叶わず、幾何の石神由範先生が出席して下さいました。先生は九十歳近くになられるようですが、若々しくお元気でした。先生は現在も写真撮影を続け銀座画廊で写真展を開催されているとか。シリアに渡航されてその風景を撮ったとか。感動された様子を話して下さいました。今回五十名の仲間が遠路から、又万障繰り合わせて参加してくれました。感謝いたします。

残念ながら出席出来なかった方々の事由を海老原さんがプリントアウトしてくれました。体調不良が多いです。どうぞお大事に。堀田由美子さんの閉会の言葉の後、石神先生が音頭を取って一次会が終わり、同じ会場で二次会が開かれました。二次会は歌で盛り上がり、再会を約束して散会しました。幹事の皆様、本当にお疲れ様でした。

高校第十八回

古稀記念同窓会

発起人会 飯田 豊

学び舎の白幡台を後にしてから五十一年の歳月が流れ、古稀を迎えた。久々に皆で集まるうではないかとの声が上がりがり、十八年ぶりに同窓会を開くことになった。先ずは名簿を整理する為、地域ごとに発起人を選出、一人でも多くの友に参加をしてもらおうと作戦を開始。八月末には準備も整い、案内状を発送する運びとなった。この間、竜一高の矢口先生には、お忙しい中何かとご協力を頂き、有難うございました。心より感謝申し上げます。

そして十月二十八日、会場の松泉閣に懐かしい面々が集結。女子四名、男子六十二名の宴となった。三年生次の担任、南畝先生にはご多用のところご臨席を賜りました。記念写真撮影後、いよいよ懇親会のスタートです。篠崎女史と大竹・中村氏の名司会のもと、宴が進められた。記念スピーチとして、コンゴ共和国大使を務めた北澤氏には貴重な体験談を話して頂いた。又、地元龍ヶ崎市で大規模米作農業を展開、天皇杯を

受賞した横田氏からの報告。そして、防衛大卒の松田氏にはなかなか手に入らない日本地図を全員に頂いた。相田氏から提供の三年生次の運動会の動画も好評：と話題は尽きません。宴が進むにつれ、忘れていた記憶も蘇り、高校時代に戻り、あつという間に時が流れていった。そして、元気に応援歌を斉唱し、お開きとした。

思い起こせば、東京オリピックは高校2年生の時だった。柔道の岡野選手が金メダルを胸に体育館で報告会：感動でした。

2020東京五輪ももうすぐです。

次回同窓会は何時頃：？ 東京五輪記念、喜寿、傘寿、米寿：ずつと続けたいですね。この会が健康長寿の特効薬となれば幸いです。第十八回卒業生の皆さん次回開催を楽しみに元気で過ごして下さい。



高校第二十七回

石井 一嘉



昨年「還暦同窓会」

に続き、第二十七回同窓会を、十一月二十五日にアイガーデン下平で開催しました。

昨年話し合いで、次回からの同窓会幹事は、クラスごとにA組から順に引き継いでいくことになりました。

小春日和の穏やかな中、恩師の石島勝先生と矢口(武石)久良先生をお迎えし、参加者総勢六十三名の同窓会を盛大に開くことができました。

司会進行は高橋邦明君が務め、幹事代表の私が本日の参加に感謝の意を表した後、恩師のお二人の先生からお話をいただきました。

石島先生は現在も高校で数学を教えていること、車はマニュアル車にこだわり続けていること、お孫さんとの時間を楽しんでいることなど。また、和服で参加された久良先生は野菜作りに精を出していること今年「読

書法展」の「かな部門」で『読売新聞社賞』を受賞し、さらに書道に精進していることなどを話してくださいました。

山崎達也君の乾杯で会は始まり、自己紹介を兼ねた近況報告などが各テーブルごとに進んでいきました。

その後、大野利明君がこの日のために作製した「二十七回生思い出のDVD」が披露されました。卒業アルバムや学校編纂の記念誌を効果的に活用し、思い出の曲も織り交ぜたDVDには、参加者全員が引きつけられ、皆竜一高生の顔に戻っていました。

会の最後に、当時の硬式野球部員と竜一高初の女子マネージャーの橋詰千賀子さんと応援団員だった保坂博之君がステージに上がり、全員で応援歌と校歌を斉唱し、竜一高魂を再確認することができました。

次回幹事代表の池辺一君が皆さんとの再会を祈念して一次会は散会になりました。

高校第三十回

赤塚 誠

平成二十四年に招待年度として初めて学年全体での同窓会を開催してから五年、あの盛り上がりをもう一度、と前

回の参加者が少々寂しかったのもあり、多くの同窓生に参加をしてもらいたいという思いから、地元有志で企画をし、正月も明けやらぬ一月三日にアイガーデン下平にて再び同窓会を開催しました。

今回は、竜一高の校内見学ツアーを同窓会が始まる前に先行い、十数名が参加、校舎の変わりように皆驚いている様子でした。

開会に先立ち、意外と多かった同期の物故者への冥福を祈り黙とうを捧げ、現役の竜一高PTA会長でもある関君の挨拶により祝宴が始まりました。恩師である小神野先生、石島先生、大塚先生の参加も頂き、総勢九十余名による宴会は、スタートから前回よりさらに盛り上がりを見せ、名前が分かるようにと用意したアルバムや、生徒の活躍が載っている学校案内はほぼ見てもらえず、進行役の必要性はないのかも感じました。それでも近況報告は興味があるのか耳を傾け聞き入っているようでしたが、報告が終わると又、騒然たる酒宴に戻り、時間を忘れて当時の話題に花が咲いているようでした。最後に記念の集合写真を撮影し、二次会へと流れる者

も多くいましたが、次回の同窓会は還暦前後に開催するということで解散となりました。

今回は自分たちで全て準備をするにあたり、時間と労力、そして運営費を節約する必要があったため、まず同窓会のブログを開設、白幡同窓会のホームページにリンクを張り告知を行い、出欠はメールでの返信、当日の記念写真の入手もブログから、と思いついた方法にしました。多少のトラブルもありましたが、今後、同窓会の幹事さんにとって参考になればと思いい報告をいたします。



高校第三十一回有志

富永道也先生 喜寿を祝う会

山崎 裕子(旧姓 根本)

富永先生、先生の喜寿を有志総勢三十余名で祝わせていただいていたから、早や幾月か経ちますが、いかがお過ごしでしょうか。相次ぐ台風の合間

を縫って、十月二十八日 牛久は「鮎・旬の味 弥七」においてお元気なお姿を拝見し、会に携わった卒業生一同、心から喜んでおります。

一高を卒業して四十年近くにもなりますのに、先生は必ず一人一人に声をかけてくださり、当時の私達の些細なあれこれまでもよく覚えていてくださる事には、いつも驚くと同時にたいへん有難く、嬉しい思いで一杯です。

当日いただいたスピーチでは、折しもその前の週に行われた衆院選に触れられ、与党大勝に至った流れから、根強く存在する日本人の気質に危惧を込めた思いを、朝刊のコラムを引用してお話しくださりました。長く社会に身を置き、時には安易に流れに任せてきたことを省みると、耳の痛い話です。周囲からはベテランと呼ばれ、現状維持でよしとする温い気持ちに喝を入れられた思いがいたします。

私自身、同じ生業に従事してきてつくづく思いますが、教師から教え子への唯一のギフトは「言葉」です。真の真情から発せられた言葉には、力があります。いつか道に迷って途方にくれた時、どうかこの一言が、少しでもこの

子を助けますように、と、私達は先生から、そういった言葉を残すもいただいできました。

長きにわたり私達の前を歩き、身をもって生きる姿勢を示してくださった先生には、感謝の念に堪えません。先生、これからもどうぞお元気で、人生を謳歌してください。私達はいつまでも、そのお背中を仰ぎ見ながらついていきたいと思います。



高校第三十五回

満保 克則

平成二十九年四月八日、入学式後日の桜咲き誇る土曜日、白幡同窓会に私達三十五回生は招待されました(総会二十六名 懇親会五十二名)

二次会五十一名)。総会の式典では、在校生の応援団、吹奏楽部が演奏、演奏で校歌斉唱に花を添えてくれました。感極まる始まりとなりました。卒業以来三十四年ぶりにお会いした方もおられましたので懐かしさと共に、三学年次担任としてご指導いただきました恩師であると共に母校のOBであります齋藤佳郎先生(高八回)、木野内昭治先生(高十三回)も元気に出席されており、うれしいかぎりの総会となりました。記念品贈呈後の挨拶では、僭越ながら私から学校時代の思い出を語らせていただきました。

私達が生まれた一九六四年。東京オリンピック柔道中量級金メダリストとなった岡野功先輩(高十四回)の残像を感じながら受けた保健体育の柔道の授業、当時教頭先生の立場で授業を担当していただき、竜一高の歴史も交えてご教示いただいた野口武太郎先生(中四十回)の社会、担任が数学の藤沢宏至先生(中四十回)が為に、自主学習の時間が数学の授業に代わり、一日二回のダブルヘッダーになってしまった厳しい数学の授業、当時を思い出したのか

同級生の中には、苦笑していた方もおられました。総会は無時終了し、懇親会は、アイガーデン下平に移動しての開催となりました。懇親会から参加の同級生もおりましたのでアイガーデン下平の二階ホールは、満員となり、熱気で満たされた懇親会となりました。

二次会は、各々分かれ三十五回生だけとなり、アイガーデン下平一階の座敷の間での開催となりました。同窓会顧問として参加いただいたおりました恩師齋藤佳郎先生の参加や二次会から参加の同級生もおりましたので尚一層の盛り上がりとなりました。その後移動して三次会までつづき、終電間際まで元気に騒ぎ、語り合い、楽しい一時を過ごしました。

それからまもなく情報網の発達の影響でしょうか、SNSにより同級生の連絡網(LINE)が広がり、七月に同級生四人と母校の野球応援に行く機会に恵まれました。メンバーといっても私にとつては、三人とも出身中学もちがうし、同じクラスになったことのない同級生でありまして不思議なメンバー構成での野球応援となりました。車の中

では、「仕事何しているの?」「子供さんは?」から始まり半分自己紹介のようなところもありながら、青春時代に戻ったかのように、和気あいあいと一緒に応援に出かけてきました。これも白幡同窓会があることならではの縁でしょうか。

最後に長年運営に携わりご尽力されておられる関係者の方々に感謝申し上げますと共に「同郷の朋」と再会、触れ合う機会をいただきまして誠にありがとうございました。



音楽部

十五年の世代を超え響く歌声 南畝清志先生を囲んで…… 音楽部合同OGOB会

大野 雅之(高30回) コトの発端は、新聞記事でした。

平成二十八年九月から毎日新聞紙上に十三回にわたり連載された「ぐるっと首都圏・

母校をたずねる」。わが竜ヶ崎一高が取り上げられたのは記憶に新しいところですが、忘れもしません九月九日付けの連載二回目。元コンゴ大使が在校時の思い出を語る記事の中に「担任の南畝清志先生」の一行がありました。しかし、その後に続いたカッコ書きの二文字に、数多の教え子たちが愕然と崩れ落ちたのは想像に難くありません。

「故人」。 思い起こせば七年前、我々二十八回〜三十四回卒業のOGOB会が開催された際、元気がいっぱいにご参加いただき、実に美味しそうにお酒を召し上がっておられた南畝先生のお姿が脳裏を駆け巡りました。

訃報は音楽部関係者LINE上で瞬く間に拡散。悲しみや追悼のメッセージと共に、思い出やら逸話やら武勇伝やら「ここだけの話」やらが、ネットを飛び交ったものです。

そうこうしている間に次週の連載三回目、再び驚愕の記事が。「お詫びと訂正。南畝先生はご健在です」。 抜かした腰をさすりつつ、恐る恐る先生のご自宅に電話させていただきました。開

口一番先生は「ウワハハハハ！」。そしてこうも続けました。「これも何かの縁(えにし)。実は大野たちの十年以上先輩たちともたまに交流している。いつそ合同でO G O B会開いてみては？」。受話器の向こうから聞こえてきたのは、昔と変わらぬ艶やかなお声でした。

平成二十九年五月二十日、アイガーデン下平には南畝先生にご指導いただいたという共通項のもと、十九回卒から三十四回卒まで、その間実に十五年ものO G O Bが三十人近くも集まったのです。

戦後初の甲子園出場(昭和四十一年)の際に急きよ結成されたブラスバンドが、のちの音楽部の起源となった話など、歴史と共に埋もれつつある史実が先生の口から次々と明らかに。その後一人一人がそれぞれの想いを語り、歌声を紡ぎ続けました。この日のために数十年ぶりに引つ張り出したフォークギターを持ち込むなど、「昭和なテイスト」一色に染まった会場の空気でありました。

締めは、応援団を兼務されたという先輩方の指揮で校歌斉唱。先生以下、全メンバーのご健勝を祈念し、近い将来

の再会が約束されました。「怪我の功名」と例えるのは甚だ不謹慎でありましょうが、くだんの大誤報を水端に、世代(とき)を超えたコーラスとしてネットワークが綴られた一時(いつとき)であったのかも少しませぬ。

余談ですが、毎日新聞連載の最終回、母校へ寄せるコメント特集には南畝先生はじめ音楽部関係者が数人、顔をのぞかせています。



生物部O B会

日 井上 和江(高12回) 時・六月四日 場 所…一高下のアイガーデン下平

梅雨入り前の日差しを少しきつく感じながら、竜鉄竜ヶ崎駅から会場へ

先輩は九回卒の手塚興広様、後輩は三十三回卒の中山一様、澤島先生をお迎え十七名のこじんまりした集まりでした。

その分自己紹介を兼ねた近況報告、部活動の思い出話などの時間はたっぷり。

南アルプスは三回ほど登ったが北へは行かなかったという人。百名山登頂成功、目下二百名山に挑戦中と張り切っている人。

賑やかだったのが十二回卒の女子四人。女子が生物部に積極的に参加したのは十二回生からとか。とにかく放課後が待ち遠しく、足立先生と学校周辺の植物観察。大量発生した毒蛾の調査で毒にかぶれて、顔から首から真っ赤に腫れあがってしまった話。

報告です。十回卒の海老原龍夫先輩は、鳥に取り付かれ六十余年。市民とバードウォッチングはもとより、近隣小学校への野鳥保護、自然観察指導等をされているとのこと。その功に「みどりの日」自然環境功労者表彰式で「自然ふれあい部門」で環境大臣表彰を受賞されたそうです。継続は力なり。

セアカゴケグモの話の間かなくなつたと思つたら、もつと猛毒を持ったヒアリというのが現れたとか。ナガミヒナゲシやオオキンケイギクは群落を作つて綺麗に咲いても外来種であつて、在来の生態系

を壊すから駆除。自然は厳しい。

そういう事に関心を持ち続けていられるのも高校時代生物部の活動があつての事だと思つていきます。

最後にマツキンリー登頂に成功し、下山途中で遭難された二十回卒の池田勝幸様の若き御霊に黙祷後散会致しました。



母校の思い出

六十を過ぎて感じる、「竜」の絆



高 21 回 石嶋 昭男

竜ヶ崎一高の思い出、という事で、まず思い出すのは、「やっとの思いで入学した」ということです。志望動機は非常にシンプルで、長兄が卒業生であつたこと、近所

の岡野先生の勧めもあり、そしてなにより自宅から一番近い高校だったからです。

一年、二年は自転車通学をしました。自宅から約三十分、四十分の道のりを、毎日自転車です。お蔭で脚力は抜群で、毎日通学道路で自動車と競争をしていました。「兄ちゃん、五十キロでているよ!!」なんて声をかけられ調子に乗っていました。

三年の前期は、電車通学に憧れ、わざわざ次兄が借りていた取手の家から常磐線で通学、後期は普通免許を取り、自家用車で自宅から通学しました。

在学中は柔道部に所属していました。柔道部の仲間はもちろんですが、三年間でたくさんさんの友人ができました。同級生に限らず、上級生、下級生、長兄の友人たちとも仲良くしてもらいました。現在も高校時代のように付き合っています。街で飲んでいて、全然知らない人でも「俺は竜一の卒業生だ」と言われると、すぐに仲間意識をもつてしまい仲良くなつてしまいます。

今のうちに竜ヶ崎一高は名門校ではなかつたので、本当に仲間と遊んでばかりの三年間でしたが、なんとか卒業す

ることができ、卒業式は白い
オーブンカーで参加しまし
た。卒業後はやはり地元
の流通経済大学に進学しまし
た。

昨年暮れ、河内町に蕎麦屋
を開店しました。河内町出身
の同級生には「なんであんな
所に新店するの？俺は河内を
捨てて龍ヶ崎に来たのに！」
と言われました。

なんだかんだで、蕎麦を食
べに来てくれる同級生、同窓
生が沢山います。本当に有難
く思っています。龍ヶ崎一高
の絆は、六十歳を過ぎてても健
在です。龍ヶ崎一高の出身で
本当に良かったと益々実感す
る今日この頃です。

我が青春のひとつ



高21回
石引加代子

白幡に載せる原稿の依頼を
受け五十年前の高校時代を振
り返ってみました。最初に思
い出すのは高校入試のことで
す。私は龍ヶ崎一高しか受験
していなかったため、もし不
合格だったらどうするのか、
今考えてもかなりの楽道家
だったと思います。入学後す

ぐのテストで優秀な生徒が沢
山いることにショックを受け
たことが思い出されます。自
転車での通学は人も車もほと
んど通らないデコボコ道を時
にはバンク、時にはドシヤ降
り、冬は頬つべたを真っ赤に
して自転車を漕ぐ姿が甦って
きます。くの字坂(?)は最
大の難所で立ち乗りで登り切
れると一日頑張れると思っ
ていました。

主要五科目は普通に勉強し
ていたと思います。古典の時
間が楽しかった。体育はテニ
スか卓球、書道の時間に男子
生徒が雨垂れを硯に受けて墨
をすったところ先生にみつか
り大目玉をもらったこともあ
りました。家庭は龍ヶ崎二高
から先生が来て下さり図書館
で授業を受けました。調理実
習は龍ヶ崎二高の調理室を使
わせてもらいました。初めて
作ったハンバーグがとても美
味しかったことが忘れられま
せん。その間男子は体育で
サッカーなどをやっていたと
思います。

二年生の春休みに行った修
学旅行は伊勢・奈良・京都方
面でした。いろいろな神社仏
閣に行ったと思いますが覚え
ているのは、二見浦の夫婦岩
猿沢池でブヨに刺され足が腫

れ上がったこと、清水寺と宇
治の平等院。ただ苔寺は雨の
中の見学で教頭先生から「雨
の苔寺は風情があつていいね
え」と話しかけられたことが
はつきり記憶に残っています。
しかし五十年の月日は輝い
ていた出来事を臆にしてい
ました。母校は坂と石段以外
に当時の面影はなくなつてし
まいました。近くを通るた
びに「私の母校はここです！」
と胸を張って言えることが誇
りです。これからの益々の発
展を祈念いたします。

アメリカで活かす
母校での経験

平田由香里(高36回)

龍ヶ崎一高を卒業して二十三
年。在学中、私の一生を左右
した事が二つありました。一
つは大野先生の英語の授業で
す。先生が趣味のバードウ
オッチングについてよく英語
で話して下さった事は、当時
の私には、大変衝撃的でした。

た。鳥を見つけた時のワクワ
ク感、鳥の美しい色と鳴き声、
その時の先生のムードがどの
ように変わったか、大野先生
は楽しそうに心をこめて一生
懸命に伝えようとして下さい
ました。英語でわかりにくい
所はわざとゆっくり繰り返す
ように話して下さいました。

最初によくわからなかった聴
き取りも先生の話に吸い込ま
れるような思いで、わかるう
とする事自体が楽しかったの
です。そして私も大野先生の
ような先生になりたいと決心
したのです。

もう一つは、ハンドボール
部の活動を通して生まれた友
情・一体感・達成感です。み
ほこ・ゆきえ・あつ子・かな
子他、あこがれの先輩達、可
愛い後輩達と苦楽を共にした
こと。ゴールキーパーとして
ボールに当たる痛みと快感、
チームメイトの華やかなブレ
イ、スカットするシュート、
みんなの笑い声、叫び声、悔
し涙、勝利の喜び、すべてが
今の私を育ててくれました。
又、顧問の桑島先生、難しい
年頃だった私達を指導するた
めに、さぞかしご苦労された
ことでしょう。

私は今、米国ニューヨーク
州マルゲート大学の教授とな

り、日本語、日本文化、言語
学を教えております。龍一で
の経験があったからこそ、卒
業後も冒険を続け、努力を続
け、前に進んでこられたのだ
と思います。

大野先生の教え方が今の私
になりました。そして学部長
となった今、ハンドボール部
の精神を改めて大事にしてい
ます。今度、地元に戻った時
は、龍一のあの石段を登り、
当時の全てを感謝の気持ちで
味わいたいと思っております。

授業・クラス・恩師
根本 雄一(高36回)
龍ヶ崎に生まれ育つた私に
とつて、「龍一」は身近な存
在であり、将来は龍一高生に
なるものと当然のように思っ
ていた。しかし、いざ入学し
てみると、近隣の中学校から
優秀な生徒が大勢集まってお
り、かなり気後れしたことを
覚えている。

特に、英語と数学の授業
は、中学校に比べ、内容が濃
く進度も早く、ついていけ
るか心配した。英語は、一年
次、飯島國雄先生にご指導い
ただいた。教科書(ユニコー
ン)は、白黒の写真が数点の
みで、小さな活字がぎっしり

詰まっていた。授業中、指名され満足な解答ができないと着席が許されなかった。また、毎時実施される単語テストも難解で、単に英単語の意味やスペルを暗記するだけでは不十分であり、辞書(新英和中辞典)の例文もチェックしておくことが求められた。英語学習の厳しさをスパルタ式で教えていただけたと感謝している。二年次は大野英二先生からサイドリーダーを通して英語で文学を鑑賞する楽しさや、当時珍しい存在であったネイティブスピーカーと英語で話す機会を与えていただいた。三年次には齋藤佳郎先生から本格的な英語をご指導いただいた。先生の美しい発音、筆記体等々、すべてが格調高いものであり、貴重な一年であった。入試間近の雪の積もる早朝、いつもの教室に行くときと出席者は私一人であった。演習問題が印刷されたプリントをもとに、日頃から恐れ多く感じていた神のような存在の齋藤先生からマンツーマンで優しく丁寧に指導いただいた。三十余年経過した今も鮮明に覚えている。

で温かな集団を形成していた。夏休みには、先生引率の下、厚木や日光でクラス合宿を行った。三年次は井坂勝男先生に大変お世話になった。竜一の恩師には、社会人になつてからも、人生の選択の場面において、折にふれ、ご相談申し上げ、ご指導いただき今日に至っている。心より深く感謝申し上げます。



高 36 回
敷田多美子

吹奏楽部で学んだこと

この原稿を書くにあたり、三十三年前の高校生だった私の一日を思い出してみました。朝、自宅のある新利根村から関東鉄道の青いバスに揺られ、窓の外に広がる田んぼを眺めながらの通学。学校に着いてまず向かうのは、石段を登って右手にあった吹奏楽部の部室でした。部室の前には私たちが「日本海」と呼んでいた小さな池があって、朝は日本海を眺めながらクラリネットの基礎練習からスタートしました。授業の休み時間になると、浪川の出張パン屋で、コッペパンにソーセージ

のフライが挟んである「肉ボツカ」をゲットして早弁。昼休みは部室で練習。放課後も毎日部活。時々、竜ヶ崎駅前のドムドムバーガーや、市役所近くのココスにて、部活の仲間と時が過ぎるのを忘れておしゃべりしたのも楽しい思い出です。あの頃は、「部活↓食べる↓おしゃべり↓部活」を繰り返す毎日だったような気がします。いったい、私はいつ勉強していたのでしょうか?!

今、私の娘が高校一年生から大学受験を意識したカリキュラムや、試験をこなしているのと比べると、何とおおらかで、のん気な高校生活だったのかと思ひ返します。そして、この良き時代を過ごせたことが自分自身の宝物になっていると感じています。

吹奏楽部で過ごした三年間で、大切な仲間と出会いました。今も、年に一度は集まって親交を深めています。そして、毎日続けた部活から、物事を積み重ねることの大切さを学びました。私は今、外観に悩みを抱える人や、心身の不調や病気に苦しむ人をメイクによって支えるリハビリメイクの仕事をしています。メイクの技術も、楽器の演奏と同じで、手を動かさないとすぐに衰えてしまいます。坦々と基本を繰り返すことが、人に喜んでもらい、人の心を動かす仕事につながる事を感じています。

部活のことばかりになってしまいました。最後に紙面をお借りして三年間クラス担任でお世話になりました南畝清志先生にお礼を申し上げます。スーツ姿でいつも穏やかに、時にいたずらっぽく笑う先生に見守られ、三年間をのびのびと、安心して過ごすことが出来ました。本当にありがとうございました。

これからも母校、竜ヶ崎一高の益々の発展をお祈りいたします。

校歌とともに

新木 圭彦(51回)

『千秋の雪積もりたる 富士の高嶺の雄姿ぞ 幾万代の後までも 変わらぬ誠の鑑なる』

私は、グラウンドでこの校歌を何度歌ったのだろう…。二十一年前。伝統ある竜ヶ崎第一高等学校に入学し、硬式野球部に入部した。竜ヶ崎第一高等学校の校歌を甲子園で歌うために、必死に練習に取り組んだ。名門校の硬式野

球部ということもあり、練習量の多さも然ることながら、練習内容も厳しく、毎日が辛く精神的に幾度となく追い込まれた。しかし、チームメイトや家族の支えもあり、三年間続けることで技術面だけでなく、精神面においても鍛え成長することができた。

当時、私はチームメイトと比べても決して上手ではなく、試合でもチームメイトに期待されるほどの選手ではなかった。そんな私に、当時監督であった宮本正和先生は「勝負へのこだわり」や「主将としての役割」など、たくさんのお話を熱心にご指導してくださった。仲間とともに切磋琢磨し、甲子園出場を目指したが、最後の大会では、力及ばず県大会で敗れ、自身の高校野球に幕を閉じた。

今、私は中学校の教師として教壇に立っている。また、野球部の顧問として、当時監督さんから教わった野球への熱い想いを伝えている。微力ながらも私なりに後世に残せたいながら指導にあたっている。

来年もまた、甲子園の季節がやってくる。泥まみれにな

りながら全力で白球を追いかける選手たち。勝利のために仲間を励ますチームメイト。スタンドで声を囁らして応援する保護者や学校関係者の人たち。甲子園で活躍する人のたくさん、の想いを見るたびに、二十年前のあの頃を思い出して、胸を熱くする。

来年は第一〇〇回全国高校野球選手権大会の記念すべき大会である。我が母校の校歌を甲子園の大舞台で聞けることを心から願いたい。

母校からの贈り物



高 51 回 拓
松尾

私の竜一の思い出は男クラなくして語れない。共学だったはずが高二になると教室内は男一色(ダンイーターと呼ばれた)、「女子高生」は「空想上の生き物」へと変わった。物理の教科書は男クラへのパスポートと揶揄され、一年生のクラスメイトから盛大に見送られた。それはあたかも戦地に赴く勇者の様であり、罪を犯して投獄される罪人の様でもあった。当時の担任の諏訪原先生からは「男クラは男クラに向いている

奴がなる」という謎の饒の言葉で頂戴し、男クラでの生活が始まる。羞恥心をどこかに置いてきてしまった四十五人の男達と謳歌した日々は、これまでの人生の中で最も充実していたと感じる。

文化祭では力の限り休憩所を営み、クラスマッチでは野郎の咆哮が黄色い声援をかき消した。修学旅行では熊本城の井戸に石を落とし着水までの時間から深さを計測し、野球応援では野球部ダンスを完全コピーして足から流血しても踊り続けた。購買への最短経路は窓からの垂直降下という解を導けば躊躇なく実行し、他クラスから「昼休みになる」と男クラは空から降ってくる」と言われたこともあった。そして一九九九年三月、我々は新校舎完成に思いを馳せながら卒業。俗に「ブレハブ卒業」と呼ばれる竜一史上稀有な学年であった。

現在私は数学教諭として県立高校に勤務している。一人でも多くの生徒に「高校は楽しかった」と思って卒業してもらおうべく、共に苦勞し、共に笑い、立場が変わった高校生活を過ごしている。最終目標は、先ほど述べた竜一での最高の高校時代を超える、熱

い三年間を教員として過ごすことである。

二十年も経つと残念な話もあり、我々五十一回生は私の知る限り三名の物故会員がいる。そのうちの一名は射撃部で共に過ごし、刎頸の友と感じていた人物だったが二〇一六年夏に癌で亡くなった。生前、彼に感謝の言葉を何度直接伝えることができなかった。悔やんでも悔やみきれない。いつでもできると思っていたことがある日突然できなくなるということを経験し、日々を懸命に、機会を大切に生きて生きねばならないと、この親友に教わった。

友人、職場、サークル活動私の周りには実にたくさん白幡同窓会員がいてくれる。この繋がりこそが母校竜ヶ崎一高からの一番の贈り物だ。この原稿を書きながら中学三年生の頃の進路選択は本当に間違っていたいなかったと改めて実感した。

一生の宝物

半田 和美(高51回)
(旧姓:新田)

「うわ…。やばい」
里帰り出産のために実家に帰っていた私は、懐かしいアルバムをめくっていた。自然

と当時の口癖が出る。女子高生に戻っている。

高校時代の友人Kが結婚すると連絡がきたのは少し前だった。披露宴で流す映像を作るために当時の写真を集めていたのだ。K、T、Aと私の仲良し四人グループで最後の一人がとうとう嫁ぐ。感慨深い。写真のなかで屈託なく笑っている四人を見て、その当時二十年後の自分をどう思っていただろうと考えるが、思い出せない。いや、二十年後なんて想像できなかったかもしれない。

義務教育期間で自分自身の基盤をつくるとしたら、高校時代は人間関係の基盤をつくる期間ではないだろうか。卒業して、高校三年間の何倍もの時間が過ぎて、変化するものもある。環境や友人関係、もちろん肉体も加齢によって変化する。しかし披露宴に集まった仲間たちは、みんな当時の、そのまんまだった。「ひさしぶり」「どうしてた?」なんて聞きながら、あの制服を着た姿が、部室のにおいが、休み時間に走った公衆電話の感触が、ぶわっと蘇る。

あの時好きだったものは、今も好きだ。大人じゃないけど大人になりたい、子ども扱

いしてほしくないけどまだ子どもでありたい。そんな複雑で微妙な三年間を共に過ごした仲間は一生の宝物になった。次に実家に帰る事があつたら、あの石段を一步一步登ってみよう。自分自身の中で変わったものと変わらないものを感じるために。

母校への愛着は何の御縁か



高 61 回 孝紀
平田

牛久市出身の私ですが、今の御縁か、現在は龍ヶ崎市内に住み、毎朝竜一前の道を通って通勤しています。『道頓堀』の狸がまた居なくなつたことを除けば、私が通学していた頃と景色は変わらず、もう登らない正門坂とかつて着ていた制服を横目に通勤することが日常となっています。

高校時代、私は白龍祭の実行委員に参加したことをきっかけに、諸先生方・先輩方にお誘いいただいたことから生徒会役員選挙に立候補しました。副会長として当選し、翌年は生徒会長として信任をいただき、高校生活のすべてが生徒会室にあったと言つても

過言ではありません。なにせ生徒会活動の閑散期ですら入り浸って談笑したり、勉強したりしていた思い出の場所です。あまりの居心地のよさに、許可なく合鍵をつくって職員室に呼び出されたときの恐怖は、今でも肌に残っています。

白龍祭は生徒会活動の花形でした。一年間の半分は白龍祭のことを考えていたでしょう。実行委員の役員集めに始まり、有志スタッフを募り、企画を具現化し、直前の大修正を乗り越え、そして歓喜の大団円。その過程は一筋縄ではありませんでした。私自身、リーダー素質に長けるものがあるとはいえず、数えきれない失敗をし、その分だけ仲間

に助けられました。当時は仲間内に気恥ずかしく伝えられないことも多かったです。白龍祭を思い起こすと、感謝を伝えたい人がたくさんいることに気づきません。また、組織として動き、一つの企画を成功させることの難しさを痛切に感じる一方で、仲間と切磋琢磨し、同じ目標へ邁進していたあの充実感は、忘れえない青春のページであったと今では思えます。

今年の六月、白幡同窓生有

志の方から機会をいただき、白龍祭にて餅を搗きに行つた際、実行委員の生徒が走り回っている姿を見ました。かつての自分に重ねて見ていると、当時に戻つたかのように心が弾みました。

竜一卒業後、私はそこまで母校に愛着を持つていた方ではないでしょう。当時からすればキラキラした思い出ばかりではなかったからかも知れません。しかし、改めて白龍祭に参加する機会を得、あの白幡台の地を踏むと、気づけば溢れる想いに胸が詰まります。やはり私の母校はここである、愛着をもって言えるようになったのは、竜ヶ崎一高との切れない御縁のせいだと実感するのです。

時は流れず

大和 友紀弘 (高61回)

高校生活のことを文章に著そうとした時、ふと、「時は流れない、それは積み重なる」というある哲学者の命題を思い出した。一般的に時間は川のように「流れる」ものとして表象される。しかし、過去は現在の下層に活性化可能な形で沈殿しているのであり、その連続性は「流れ」の連続性ではなく、「積み重なり」

という非連続の連続性であるという。ここで想起するのも、竜一での高校生活という私の過去の一断面である。

私は特に勉強に関しては自他ともに認める劣等生であり、決して褒められた生徒ではなかったはずである。その反面でという訳ではないが、真つ先に思い出すのは部活についてである。

剣道部における部員たちとの活動は、まさに「苦楽を共にした」という表現がふさわしい。多くの楽しい思い出があるが、一方で当時の私は真夏の剣道こそ死に最も近い活動であると実感するに至った。しかしそれを曲がりなりにも三年間やり切つたことは並大抵のことには屈しない精神力を身に着けることになつたことは間違いない。引退まで一人も欠けることのない学年となつたことも、感慨深いものがある。

努力が奇跡を生むとよく言われるが、しかしそれは一面にすぎない。実際は往々にして奇跡が努力を生むのであり、そんな努力ができたはずはなかったのになぜかやってしまったという時期が人生にはあるのではないか。部活だけでなく、遅れを取り戻そう

とした引退後の追い込み受験勉強も含めて、私にとつて竜一での日々とは、そのようなものではなかったかと思う。そして卒業してからも交流を続けてくれるのは、やはり竜一の仲間たちである。高校生活という過去は流れ去つたのではなく、現在の私を形作る前提として積み重なっているのだということを実感する。

世界のどこかで



高 61 回
鈴木 秋奈

私が竜ヶ崎一高に入学した時に感じたこと。それは、「なんて人が多いのだろう」ということである。私が育つたのは、龍ヶ崎市からほど近い田舎のまち。同級生の数も、小学校十三人、中学校八十人なので、当然ながら全員知り合いになる。なんなら、役所や郵便局の職員だつて知り合いであるくらい、狭いコミュニティの中で育つてきた。

先に竜一に入学していた、二つ上の兄からの「お前も竜一にしたら？」の一言で入学を決めた。入学前の学校見学の際に、綺麗な校舎や秀囲気

に惹かれたのも理由の一つであるが、その時には気がつかなかった。こんなに人が多いなんて。同級生が二〇〇人を超え、クラスがA-G組の七クラスにも分かれているなんて！少々ビクつきながらも、しかし、入学して生活をしていくうちにあることに気がつく。出会つた同級生、先輩後輩みんな居心地がいい人ばかりなのだ。言葉で伝えなくても、考えていることや思っていることを自然にくみ取り、時には笑いにまで変えてくれる。どんな学校に行つても、きつと素敵な友達はできると思うが、それでもやはり、ここで出会つた人たちは、今でも私にとつて、とても身近で、特別な存在である。

高校卒業後、スウェーデンの大学で一年間勉強したことがある。驚いたのは、その大で五つ上の竜一OGに出会つたことである。世界ってなんて狭いんだらうと思つたが彼女とはとても気が合い、書道のK先生の話で盛り上がった記憶がある。やっぱり竜一生活っていいなと異国に来て改めて感じた。ただ、このように偶然竜一卒業生に会えたのは、これまでこの一度きりである。よく県外で会つた

人に「どこの高校出身なの?」と聞かれると、「茨城の高校です」と答えるところ、「茨城の竜ヶ崎一高です」と答えるようにしている。また何か、新しい出会いが待っているかもしれないからだ。

今回、執筆の話をくれたO君、これまでお世話になった先生方や同級生などに改めて感謝申し上げます。まだ出会ったことのない竜一卒業生の方々にも、ぜひいつかお会いしたい。この世界のどこかで。

母校と私の人生

竜ヶ崎一高で芽生えた「私の指導理念」



高13回 荷見三七子

女子生徒が少数で勉学に良い環境だろうと、医師であつた父は竜一を奨めてくれた。幼少の頃からギターリストになりたいという夢を持ったが、竜一に入るとその夢を捨て父の跡を継ぐ医師になろうと思つた。それも、のどかな高校生活に慣れ、がむしやらに勉強する気力も失い、好きだった英語を勉強した結果、

青山学院に入学した。卒業近い昭和三十九年東京オリピックでアルバイトとして外国人をエスコートする仕事をし、外国に行つてみたいという素朴な夢を抱くようになった。

四十年世界に羽ばたく日本航空客室乗務員三十五期生になつた。DC6型機からあらゆる機種、ジャンボ機と戦後JALが導入した全ての機種に乗り、スチュワーデス、パーサー、チーフパーサー、部長、副本部長として四十年間ひたすら、お客様へのおもてなし、サービスをしながらか安全管理、そして多くの部下を管理統率する立場に専念してきました。振り返ってみると入社時は結婚もダメ、定年は三十三歳、SSはほぼ二三年でやめる時代でした。その後大型機ジャンボ時代になり職場も大きく転換し結婚もオーケー、定年制もなくなり、女性の職位も向上し、管理職の道も開かれました。SSの歴史の扉を開いた一人として自負しております。

当時ジャンボ機はDC四十名YC三二〇名の満席で、男女乗務員二十名と共に一機の長として、フライト時は常に緊張の連続でした。お客様から

は、女性で「だいたいようぶ」かと心配されない様に、常にほほえみと余裕を忘れない様に、しかし心は不安と喜びの交互の毎日でした。目がまわる位多忙な機内で「ふっと」あの竜一の、のどかな田園風景、校舎、そして応援してくれた先生方、同級生の顔が浮かび、勇気づけられた事もありました。男性との葛藤、女性の嫉妬等、多くの壁もありましたが、その壁をのり越える強さも身につけました。今でもお客様とのフライトの想い出は、私の宝物です。その中でも忘れられないのはレスキューフライトです。非常緊急時のフライト、ベトちゃんドクちゃんフライト、若王子さん救出フライト、難民救出フライト、国を追われた人々をお乗せした時のフライト等々、この平和な日本に生きている私にとっては、大きな悲しみ、そして感動するフライトでした。立場が違えば、処世観、人生観も変わってくるものです。しかし青春期に竜一で育んだ要諦は変わる事なく、部下を持った立場になつた時にも、指導理念として生き続けてます。それは「美点凝視」という人間学としての視点です。この事について

は、私の著書「女性が会社で成功する法」に述べているが、後輩の皆様にご紹介しましょう。美点凝視とは、人間誰しも部下に目をやると、短所ばかりが目につき、それを指摘したり、咎めたりしがちです。でも上司や同僚に「善にも棒にも」と囁かれる人間でも、必ず長所があります。必ず美点があるのです。その美点を見つめます。部下は輝いてきます。そうなれば、もう部下を叱る必要はありません。そんな気持ちを持ち続ける事こそ、私の管理職としてのポリシーでした。

現在、三つの大学で、サービス学、ホスピタリティ概論を教えますが、常に人間に興味を持ち、何よりも人を大切にして、その人の立場を認める事がサービスの精神であると、竜一時代に学んだ素朴さ、おおらかさと、JALで学んだ人に尽くす喜びが自分の喜びであるという気持ちを持つて私の人生のお返しとして、学生の皆さんに教えています。

竜一の三年間は、私の人生にとってかけがえのない多くの事を学んだ日々であつたと思います。その学んだ事が今大学生を教えている自分の身

にとつて血と肉となつていてと思います。

私の母校竜ヶ崎第一高等学校の益々の御発展をお祈り申し上げます。

(株式会社テレコムメディア取締役)

竜一卒業後の人生を振り返る



高26回 信之 高橋

私が在学していた昭和四十六年から四十九年当時の竜ヶ崎市は長閑な地域で、現在と違って駅前からの商店街も活況を呈していたように記憶している。その当時の国内経済は、第一次のオイルショックが起こり、それまでの高度成長期から安定成長期に入ってきた時期でもあつた。そのような中、私は友達に恵まれ、高校生活を満喫していた。

竜一を卒業した昭和四十九年頃は、前年の四十八年に第一次石油ショックが起こり、二〇%の物価高騰の中、トイレットペーパー騒動が起こり、昭和四十九年は戦後初めてのマイナス成長を記録した時期でもあつた。しかし、翌昭和五十年には、経済成長率

も5%回復し、私は平穩無事な大学生活を都内で送っていた。大学時代も、竜一の同窓生との交流は続き、得難い友情と様々な人生経験をさせて頂いた。その後、国内経済は円高景気から安定成長へと移ってきていた。そのような中、私は昭和五十三年四月に当時の関東銀行(現在の筑波銀行)に入行し、以後現在に至っている。

地域銀行は、地域経済を発展させることが大命題である。地域のために貢献すべきと銀行員生活を送ってきたが、その後バブル経済の崩壊に伴い、銀行員としての使命を実感することになる。当時一九八〇年からの日銀による金融緩和を受け、国内には余剰資金が膨れ上がり、株・土地が急騰し国内がまさにバブル景気に酔いしれた。その後、バブルを鎮静化するため政府による総量規制が発動、国内経済は一挙に崩壊の一途を辿った。また銀行も不良資産の処理に追われ、地域経済を必死になって守るため、取引先との様々な交渉事も経験をした。

その後、二度の合併を経て、平成二十二年三月に筑波銀行となり、翌年の二十三年三月

十一日の東日本大震災を経験することになる。東北から茨城にかけての震災による被害は、甚大なものであり多くの人命と財産が一瞬にしてなくなるという経験をした。銀行内に対策本部を設置し県内各地の状況を把握し、現場の対応に追われた日々は、今も鮮明に覚えている。人に対する思いやりや相手の立場になって考えることの重要性について痛感した。

これからの金融業は、これまでの金融円滑化ばかりでなく、地方創生の観点から様々なことを地域に提案していくことが重要であり、地域が元気になる仕組みづくりや新たな産業の創生といったことを積極的にやっていかなければならぬ。そうした中で、今も数年に一度の同窓会での仲間との再会は、私には得難い出会いの一コマであり、そこで培われる同窓生との連携や昔ながらの仲間意識は極めて重要であり、大変ありがたいと感ずる今日この頃である。

最後に、竜ヶ崎一高がこれから益々発展されますこと、同窓生の方々の益々のご活躍を祈念し、結びとさせていただきます。

(筑波銀行 専務取締役)

陶芸を生業として



高 27 回 植竹 敏

今年四月、初めて白幡同窓会総会に出席したときのこと。開式の辞の後、体育館の緞帳が上がると応援団とチアリーダーの皆さんが現れ、校歌と応援歌の斉唱が始まった。思わず胸が熱くなってしまう。演出に乗せられた格好だ。一糸乱れずとか集団行動とか苦手な高校生だったのに。澁刺としたチアリーダーの女子生徒、やさしそうな学ラン姿の男子生徒、若き後輩諸君の様子を拝見しながら、これからの長い人生幸多かれと素直に思えた一瞬でした。還暦を迎えるというのは、こういうことなのかもしれない。

私は現在焼き物を作ることを生業としています。そのきっかけは高校時代にあったように思う。当時、バス、電車を乗り継ぎ一時間弱かけて学校まで通っていた。一、二年のころはまじめに通学し、射撃部の活動にも励んでいたものの年次が上がるにつれ、自由でおおらかな校風をほき

違え、勝手気ままな学生生活を送るようになっていった。三年生になると男女共学のクラスになったこともあり、それはヒートアップ。恋愛もし、失恋もし、円形脱毛症にもなった。あのときは六十余の石段がうらめしく、足早に上り下りしたものだ。そんな頃、黒澤明監督の映画「生きる」がリバイバル上映されて話題になっており早速東京まで観に行つた。人が生きるという意味を問うた直球勝負のこの映画は、十七歳の私に感動をもたらし、澀となつて心に残つた。

居場所づくりだけの目的で受験し、四年間の東京暮らし、卒業が近づくとつれ高校時代の想いがアタマをもたげてきます。時間に縛られるのが苦手な私は、時間を自分で差配し一人で完結できる「モノづくり」を仕事にしたいという願望があったんです。ワガママの極み一般社会では通用しませんね。でも陶芸の世界では生業としてそれも可能かと根拠もなく考えました。

大学卒業後、笠間の中野晃嗣先生に師事、無我夢中の四年間を過ごし、一九八四年につくば市に築窯しました。今年で独立三十三年になりました。今

この間、膨大な量の焼き物を産み世に出してきました。大きな感謝と共に多少の畏れも感じるようになったこの頃です。

白幡台を離れて四十三年、記憶は薄れるものと云いますが、私にとって高校時代の想いは色褪せないばかりか、年を重ねる程に焦点が合ってくるようにも思います。

今、白幡同窓会の記念品を作らせて頂いております。ボディに鎬模様をあしらひ、笠間の伝統釉である「白秋釉」を施した校章入りの湯呑です。この器を手にした同窓の皆様がお茶を飲みながらでも、ふと竜一時代のことなど想い浮かべていただければ幸いです。また、このような機会を与えて下さった同窓会の皆様はこの場をお借りして御礼申し上げます。ありがとうございました。



高 42 回 豊嶋真千子

同期の皆様、お世話になりました先生方、お元気で過ご

石段を登るようにならず

(日本工芸会正会員)

ごしですか? 竜ヶ崎一高を卒業してから約二十五年の月日が流れました。学生時代は決して優秀でもなく勤勉でもなかった私が、同窓会報に寄稿させていただく日が来るとは全く想像していませんでした。当時の私が知ったら、きつとびつくりすると思います。

現在、私は声優になり、NHK『ダーウィンが来た!』いきもの新伝説』でナレーションを、そして平成二十八年六月からアニメ『ちびまるこちゃん』でお姉ちゃん(さくらさきこ)役を担当させていただきました。声優の仕事は、アニメ、洋画の吹き替え、番組ナレーション、CM、イベント等多岐にわたり、毎回ドキドキしながら収録に臨んでいます。

竜一を思い出す時私の頭に浮かぶのは、校歌の一節「石段登る六十余」のこの歌詞。高校受験の時に初めて校舎へ続くこの階段を登った時は、疲れて途中で一度休んだことを覚えています。そして一年、二年と過ごすうちに立ち止まらずに、休まずに登って行くことが出来る様になりました。毎日登ることで、少しずつ少しずつ、自分でも気が付かぬうちに体力がついてい

たんですね。振り返ってみると高校時代の私は勉強もそこそこ、部活もせず、ただ毎日をなんとなく過ごしていました。当時から声優になりたいという思いはありましたが、インターネットもない時代、茨城でのんびり暮らす私にとつて、それは遠い遠い叶うことのない「夢」の様に感じられていたのです。そんな私は、学校行事を大いに楽しみました。生徒が自主性を持ち自由につくりあげる白龍祭、学校全体で応援する高校野球の暑い夏、クラスの結束力が強くなる球技大会、修学旅行で行った京都、広島風景…。それらは今でも鮮やかな思い出となつて私の心に残っています。

卒業後は短大へと進学し明治大学三年次に編入。そして大学と並行して声優養成所に通い、卒業と同時に今の事務所所属となり、私の声優人生がスタートしました。最初の頃はレポーター、ラジオのパートナリティー、歌のお仕事等予想外の仕事が多く、どれも手探りで現場で勉強させていただきました。オーディションになかなか受からず落ちこんでいた時期も多くありました。そんな時期は舞台

のお芝居を経験したり、映画を観たり、仲間と勉強会をしたり、結果が出なくてもとにかくコツコツと自分の目指す演技ができる様に研究していました。私にとつてまさしくその年月は「石段を登る六十余 一足ごとに踏みかため 心を鍛え身を練りて」でした。一步一步でも、ゆっくりでも登り続けていけば、いつか目指す場所に辿り着くことができるのです。

実はこの原稿を書くにあたり、当時を思い出そうと二十数年ぶりに校舎を訪問しました。私が学んだ校舎は建て替えられ大変立派になっておりましたが、あの石段は当時のまま。久しぶりに六十余段をゆっくり登ってみました。予想以上に軽やかに登りきることが出来、自分も少しは成長できたのかなと嬉しく思っております。

最後になりましたが、母校竜ヶ崎一高の益々の発展と卒業生の益々の活躍を祈っています。

(声優 青プロダクション所属)

トピック①

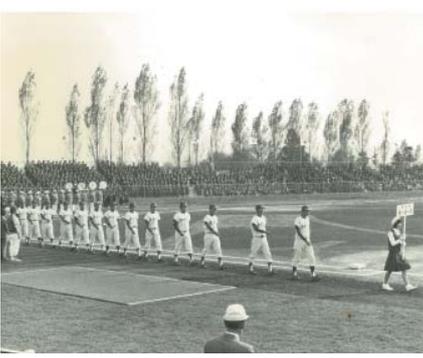
国民体育大会が再び茨城で開催

第七十四回国民体育大会「いきいき茨城ゆめ国体」が平成三十一年に開催されます。茨城県で国体が初めて開催されたのは昭和四十九年第二十九回国体です。二年後の茨城国体でも竜ヶ崎一高関係者の活躍が期待されています。

今回の「トピック①」では前回の茨城国体で優勝した軟式野球部を取り上げました。

優勝までの軌跡

監督としての思い出
林 静男(高22回)



私が竜ヶ崎一高を卒業した四年後に茨城県で国体が開催されようとしていた。高校野

球で軟式が注目されることはめつたにないが、国体出場となれば地元の期待が高まる。そこで、母校の軟式野球部を強化して県代表となり、国体で活躍することができれば茨城県の総合優勝に貢献できると思い、若輩ではあったが、自分の指導力を試してみようとして監督になった。部長の南畝清志先生、副部長の小竹修先生、強化に向けて基礎を築かれた前顧問の横須賀英明先生や先輩方に支えられ、一九七四年の茨城国体での活躍を目指して情熱を傾けた青春時代が思い出される。

率いたチームは、試行錯誤するうちにみるみる力をつけ、二年後には県大会で優勝を争うまでに成長した。そして国体開催二年前の春には県大会を制し、関東大会で初優勝。当時の大竹キャプテンが優勝旗を手にした時は、「全国優勝も決して夢ではない」と思った。

その後は県の国体強化指定校として県外に遠征して強豪校との練習試合を重ね、チーム力の向上に努めた。徐々に私の理想とする野球ができるようになり、翌年夏には北関東大会で準優勝。新チームになつてからも秋の県大会を制

した。その後、母校の発展と卒業生の活躍を祈っています。

して関東大会で活躍し、翌年の国体に向けて確かな手ごたえを感じた。

そして迎えた国体開催の年。夏の県大会と北関東大会を危なげない勝ち方で優勝し、大阪で行われた念願の全国大会に初出場した。この時も活躍が期待されたが、実力を発揮できないまま一回戦で富山商業に二対二で敗れ、苦しい敗戦を味わった。そこで、部員一人ひとりに敗因を分析させ、国体での勝利を誓い合ってメンタル面の強化に努めた。

その二ヶ月後、土浦市営球場で国体が始まった。この時は全国大会での教訓が生かされ、栗田―青山のバッテリーを中心に理想的な試合運びで勝ち上がり、準決勝で延長十三回の接戦を制して決勝進出を果たした。決勝は夏の全国大会準優勝校、長崎県の宇久高校との対戦となった。宇久高のエースはマスコミが注目する速球投手(卒業後プロ入り)で苦戦が予想されたが、球場に詰めかけてくれた県民と竜一高の全校応援をバックに七回に打線が奮起して逆転。肘痛と疲れが出てきた栗田投手が途中から変化球主体の頭脳的なピッチングに切り

換えて最後まで踏ん張り、六対三で勝利して念願の初優勝を飾った。これらの母校の歴史に刻まれる名シーンと応援席からの声援が今でも鮮明に思い出される。

主将で投打の大黒柱であった栗田投手と、出場した選手達の活躍があったことはいままでもないが、国体での優勝は関係者全員に支えられてのものであった。数多くの試合が続いた中で、顧問・監督・部員を献身的にサポートしてくれた女子マネージャー達の力も大きかった。部員のみならず、教師・保護者・生徒が一丸となって勝利のために力を合わせる事ができる風土が竜ヶ崎一高の良さである。今でも思う。そして、温かく見守ってくださった教職員、多くのご声援をいただいた市民の皆様のおかげと感謝している。



私はその後、流通経済大学野球部の監督となり、全日本大学選手権や明治神宮大会に度々出場する機会に恵まれた。そこで十年間監督を務めた後に野球の指導から離れたが、母校への思いと野球を愛する気持ちは今も変わっていない。

(流通経済大学付属柏高等学校校長)

国体強化費の効用

南 敵 清志

昭和四十九年十月、茨城県で国民体育大会が開催されることになった。

茨城県としては県勢の活躍を目標として昭和四十七年より各競技団体を強化するための対策がとられた。高校野球の軟式の部では、県内各チームの顧問会議の結果、竜ヶ崎一高が強化校として推薦を受けた。

その後強化費として三年間にわたって毎年約百万円が支給されることになった。学校内の部費とは比べものにならない金額である。この強化費を強化合宿や対外試合に使用するようにとの指示を受けた。

私は顧問として合宿や対外試合のマネージメントを担当することになった。

合宿に加えて対外試合が大きな意味を持つことになったと思う。県内では水戸工業や下館一高に行き、両校共軟式野球部専用のグラウンドを持つているのには驚かされた。そして県外は従来では財政的に不可能だった地域にも遠征することが出来るようになった。これが強化に相当な効果をもたらしたのでないかと思っっている。

昭和四十七年には栃木県に遠征し、作新学院、宇都宮学園と対戦しいずれも勝利。昭和四十八年には当時高校軟式野球の名門であった群馬県の渋川市立工業に遠征し九回に逆転勝利をおさめた。昭和四十九年には静岡県に行き、静岡商業、島田商業を連破。この時静岡商業の顧問の言葉が印象に残った。それは「次来る時は交通費を半分持ちますよ」ということだった。財政面での余裕に驚いた。その後千葉県の銚子商業に出かけ二連勝といった成果をあげた。

スポーツというものはやはりお金をかけないと強化は困難ということをつくづく感じた。各地へ遠征する際の交通費、宿泊費、食事代等普通の部費では不可能なことを強化

費でまかなえたことは実に大きなことであった。

十月の国体を控えた夏には、全国高校軟式野球大会の県予選、さらに北関東予選でも優勝し、史上初めて北関東代表として全国大会に出場することになった。大阪で行われた大会では残念ながら富山商業に惜敗してしまっただが、国体では地元代表ということ

で出場出来ることになった。十月、土浦市営球場で全校生徒の応援を受け、北海道の室蘭工業、東京の江北高校、長崎の宇久高校を次々に破り優勝することが出来た。この快挙は選手達の頑張りとは卓越した指導力を持った二十二回卒の林静男監督の手腕によるところが大きかったことは言うまでもない。

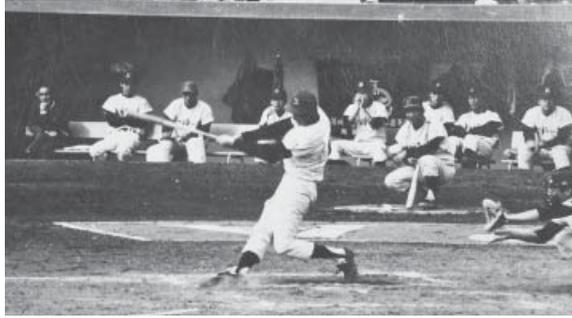
(元竜ヶ崎一高教諭)

はるか昔の部活のこと

軟式野球部主将

栗田 一正 (高27回)

原稿執筆依頼を受け、四十年ぶりに私たち竜一軟式野球部が練習をしていた旧龍ヶ崎市営球場に足を運んだ。現在は、流経大サッカー部の専用グラウンドに変わっていたが、現地に立つと泥んこのユニフォームでボールを追った



撮影：大久保 勝弘 君

日々が思い出される。放課後になると、水色の日産チェリーハッチバックに乗った林監督が球場へやってくる。その指導は緻密で論理的。ボールの握り方から投球フォーム、牽制球、フィールディング・カバリング等、相手打者を抑えるためにどんな準備、どんな工夫をすべきか、「アウトローのコントロールを」「いつでもストライクが取れる球種を」と投手に必要なすべてを教えてくれた。この頃からか、徐々に打者を打ち取ることができるようになり、ピッチングが楽しくて仕方なかった。

監督が練習に來ない日は、三年部員三人の特打の日になる。二年部員五人、一年部員六人が交代でバッティング投手になり、延々と三人が打ち続ける。ボール出しは五人の女子マネが担当。一時間、二時間は当たり前、終わるのは納得するまで。軟式ボールは飛びにくいといわれていたが、草野の打球は弾丸ライナーで、宮本の打球はきれいな放物線でレフトフェンスを軽々と越える。ふたりとも中学時代はライバル校のエースで四番。誰もが認めるスーパースター。まさか同じチームで野球ができるとは。奇跡的な出会いに感謝。後輩たちは文句も言わず、練習に付き合ってくれた。(卒業後、たくさん愚痴られました。)

また、雨の日は教室で野球ルールのお勉強。しかし、「トーナメントは負けたら終わり。年に一回あるかないかのプレーも押さえておくように」と監督からの言葉が胸に刺さった。

当時の軟式野球部はマネージャーを含め二十人弱の少人数。フアジイな上下関係。穏やかで面倒見の良いOBの方々、まじめで優秀な後輩たちに恵まれて、自由に伸び伸びとプレーさせてもらった。

通常であれば、夏の大会で引退のはずが、国体出場で十月末までにのびた。さらに、高校生活最後の公式戦、国体の決勝で勝利できたことは忘れようにも忘れられない一生の宝物。それも林監督の熱いご指導に加え、部員たちをいつも温かく見守ってくださった南畝部長・小竹副部长並びに先生方のおかげである。

(取手市役所勤務)

トピック②

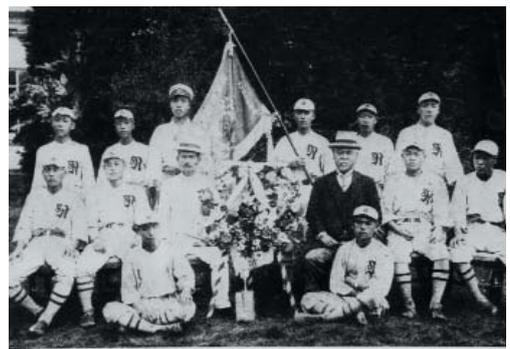
本校を取り上げた記事を抜粋して「トピック②」として紹介します。

来年一〇〇回目の夏の高校野球大会

北関東三県で 最初に全国大会出場

今から九十九年前、龍ヶ崎中(現竜ヶ崎一高)は、現在の甲子園大会に当たる全国大会に初出場を決めた。来年一〇〇回を迎える夏の高校野球大会を前に朝日新聞が「北関東の球児たち 黎明期」として本校を取り上げた記事を抜粋して紹介します。

大正七年から、関東大会(東



京・神奈川を除く)を五連覇して全国大会に五回連続出場。この原動力となったのは野球部長の西村初太郎氏。西村氏は東京物理学校(現東京理科大)を出て、竜ヶ崎中に赴任。指導は厳しく、勝負に対する気持ちは「鉄の信念、火の情熱」と称された。「凡人の練習は量でゆけ。ぶつ倒れるまでやれ」が信条。ある野球部OBは「練習は、親兄弟にも見せられないほどの厳しさだったと聞いている。ただし、その思いやりと優しさは誰からも愛された」と語った。

現在校庭の片隅に五連覇をたたえる石碑が立っている。刻まれた文字は「偉なるかな西村精神 連続優勝実には五回」。書いたのは西村部長と親交のあった「学生野球の父」飛田徳洲氏だ。今でも選手たちは練習が終わると、石碑の前であいさつをして健闘を誓う。



元校長で野球部後援会長を務める染谷信洋さん(白幡同窓会長)は「私立高校隆盛の厳しい時代だが、胸のRが甲子園で躍動する姿をまた見てみたい」と夢を語る。

寄付金に感謝

次の方々から白幡同窓会に寄付がありました。心から感謝申し上げます。

- 高8回一同 様
 - 高15回一同 様
 - 高30回一同 様
 - 音楽部OB OG 様
- ※平成二十八年十月一日から平成二十九年九月末日までの寄付です。

熊谷高校同窓会訪問記

櫻井 篤美 (高29回)



平成二十九年八月二十九日、染谷会長をはじめ、同窓会有志四名で埼玉県立熊谷高校を訪れた。そこは、明治二十八年創立の伝統校であり、今なおバンカラな気風を漂わす男子校である。門を叩いてまず目に留まったのは、赤葺を随所にあしらった斬新な意匠の本館校舎である。かつての本館(木造二階建て)は一九七八年三月に西半分を焼失したそう

で、校歌にも歌われている「赤葺」とは旧本館のそれを指し、現在の本館の屋根にも部分的に旧本館の赤葺が使用されている熊高のシンボルとなっているものである。足を右に向ければ、図書館、九〇周年記念館(生徒会館)、そして今回の訪問先である一〇〇周年記念同窓会館がある。これらの建物は卒業生の設計並びに寄付金により成るものとのこと、その熱い母校愛には驚かされる。折しも九月初旬に熊高祭の開催を控えており、生徒たちが忙しく造形物の製作に精を出す姿と吹奏楽部の奏でる軽快なリズムが飛び込んできた。

同窓会館は創立当時からその姿を留める櫛の森にたたくみ「くぬぎ会館」と称されている。一階がピロティ、二階は同窓会事務室、応接ロビー、会議室、三階はホールから成り、それぞれの階に倉庫を備えている。また随所に展示物があり、それらを見れば営々と息づく学校の伝統と歴史を感じずにはいられない。

案内の労を取って頂いたのは、事務局代表の長野氏である。氏はかつて熊高の教職にあり、退職後、専従として週に一日同窓会館で事務を執っている。事務局は現役のOB教職員二名と長野氏の三人の体制で会館の管理、総会の開催等の運営を週一回の会議を持って行っており、「同窓会だより」の紙面編集構成・発行も行っている。総会は会館のホールで行われ、近年は一〇〇名を超える会員の出席があるとのことであった。催しとしては講演会やOB歌手のコンサートなども開催されている。

同窓会の主な活動は埼玉県内各地区と東京をはじめ各地方にある十七支部にあり、それぞれで独立した活動を展開している。さいたま支部は四〇〇名を超える会員から成り、一〇の同好会活動を行っていて、昨年は現役高校生との交流を目的として熊高文化祭にも参加をしている。

また、ユニークなものとしてOB有志からの提案で始まり、同窓会も事業の一つとしてバックアップしている「熊高森づくりの会」がある。これは水源涵養や地球環境の保全の一端を担うために長瀬宝登山麓の森を借り受け、植林活動、植樹会・下刈りなどを通じて現役生、家族共々の懇親の輪を拡げているものである。

このようにいろいろな面で精力的な同窓会活動が現役生共々展開されており、卒業生の層の厚さとその熱意を感じることができた。われわれ竜ヶ崎一高同窓会もこれを見習うところも多く、同窓会の一つのあり方として参考としていきたい。

医療への貢献



高 67 回 渡邊 博文

私は平成二十六年度に竜一高を卒業し一年の浪人生を経て東京大学に入学しました。現在は二年生です。私は今回の進学選択で志望していた医学部医学科に進学することができました。

私が医学を志した背景には高校時代の気胸と祖父との関わりがあります。気胸の手術で入院した際、重篤な患者さんと数日間病室を共にし病気の厳しい現実を目の当たりにしました。また、休む間も無く患者さんと真摯に向き合う医師の誠実に感銘を受けました。

私の祖父は骨折を機に入退院を繰り返す次第に衰え介護が必要となり、昨年九月に亡くなりました。祖父と同居していた私は身近でその過程に接し、病気の進行に対して私自身が無力感を感じる一方、迅速に治療にあたる医師の姿に畏敬

の念を抱きました。そして、大学入学後の講義の中で生命科学系の講義に興味を持ち、自身の学問的興味や将来の職業の意義を考え結果、医学部を志望することにしました。

私はサッカーが大好きで高校時代はサッカー部に属し大学では一年の秋までは運動会(他大という体育会)の部活でサッカーをしていました。特段優れた足元の技術や恵まれた身体能力が無かったため、それらを埋めるための努力が必要でした。その際に身につけた、粘り強く努力を継続する精神力、自己管理能力、自己理解力、修正力、コミュニケーション能力が、サッカーをやめてから、猛勉強して進学選択を突破するにあたり大きな原動力となりました。

これから、医学的知識を身につけることはもちろんですがさらに人間的に成長して医療の発展に貢献できるように頑張ります。

進路状況

京都大	1名
一橋大	1名
東北大	5名
筑波大	21名

本校では、十年前より生徒一人一人の進路実現に向け、「Rプログラム」と称する三年間一貫の進路指導を展開しています。また、九年目を迎える筑波大入試研究会はもちろんのこと、難関大入試への指導体制も強化してまいりました。さらにはSSH(スーパーサイエンスハイスクール)事業も四年目を迎え、様々な活動を通し理系生徒のみならず全校生徒に、これからの時代を生き抜くために必要な人間力や探求力が育成されてきたように感じます。

このような学校全体での指導と生徒達のたゆまぬ努力の結果、今春の入試においても、国公立大学合格者数は八年連続一〇〇名を超え、一八八名の現役合格者を出すことができました。そのうち一〇二名が希望の国公立大に進学しています(参考までに全大学の受験者数・合格者数・進学者

数を本校ホームページに掲載していますのでご覧下さい)。また、京都大、一橋大をはじめ、本校生徒が難関大として進学を目標としている十二の大学にも現役で十名が合格、例年入学時の調査で志望者数が一番多い筑波大学にも二十一名(現役十九名)の合格者数を出し、安定した結果を残すことができたと言えます。さらには、全国の薬学部の中でも難関とされる千葉大薬学部への現役合格者が出たことも、多くの在校生に希望と勇気を与えてくれました。

大学受験を乗り越えることは決して楽な道ではありませんが、この壁を乗り越えることで、生徒達は大きく成長します。壁がないところにドラマは生まれません。今後も夢を抱き、もがき苦しむ生徒一人一人の進路実現を全職員で最後まで見守っていきたくと思います。

そんな中、この秋に素晴らしいニュースが飛び込んでまいりました。六十七回生で東京大学理科Ⅱ類に入学していた渡邊博文君が、見事医学部への進学を決定したそうです(いわゆる三年進学次における「進振り」)。竜ヶ崎一高生のポテンシャルの高さを改めて証

明してくれる朗報でした。渡邊君は、今年度の東大ツアール(TODAI倶楽部)でも本校生徒達を案内してくれたり、三年生に向けてのガイダンス(Rガイダンス)に来校しており、在校生にとつて、とても身近な存在でした。こうした身近な卒業生の知らせは、在校生にとつて、誇りであり勇気となります。渡邊君の今後益々の活躍を心から応援したいと思います。

さて今、大学入試は大きな転換期を迎えようとしています。現中学三年生が受験する二〇二一年入試より現在のセ

平成29年3月進路状況一覧

◆国公立大学合格者数

大学名	現役	進年度	合計
北見工大	1		1
北海道大	0	1	1
室蘭工大	1		1
東北大	5		5
福島大	3		3
茨城大	45		45
筑波大	19	2	21
宇都宮大	1		1
群馬大	1	1	2
埼玉大	6	2	8
千葉大	6	1	7
お茶の水女子大	2		2
電気通信大	2		2
東京外大	1		1
東京学芸大	2		2
東京芸大	1		1
東京農工大	0	1	1
一橋大	1		1
横浜国立大	1	1	2
新潟大	1		1
京都大	1		1
島根大	1	1	2
琉球大	1		1
茨城県立医療大	7		7
埼玉県立大	2		2
首都大東京	4		4
横浜市立大	1		1
都留文科大	1	1	2
北九州市立大	1		1
国公立大計	118	11	129

◆主な私立大学合格者数

大学名	現役	進年度	合計
獨協大	32	6	38
文教大	9	3	12
青山学院大	5	2	7
学習院大	6	1	7
共立女子大	8	0	8
北里大	6	0	6
慶應義塾大	1	0	1
駒澤大	26	0	26
上智大	2	0	2
順天堂大	8	4	12
芝浦工大	32	6	38
成蹊大	7	0	7
成城大	8	1	9
専修大	8	1	9
中央大	12	2	14
東京医大	2	0	2
東京女子大	6	0	6
東京電機大	25	0	25
東京農大	17	0	17
東京理大	34	6	40
東洋大	29	1	30
日本大	36	3	39
法政大	30	3	33
明治大	17	6	23
明治学院大	11	1	12
立教大	22	1	23
早稲田大	11	3	14
その他	220	13	233
私立大学合計	630	63	693

ンター試験に代わり、新共通テストが実施されます。英語四技能外部テスト導入とともに「思考力を問う」ということが大きく打ち出され、国語と数学では、記述問題も数問ずつ加わります。AI(人工知能)のキャンブリア爆発が起こりつつある今、必要なのは「思考力」です。単に知識を暗記しアウトプットする時代が終わり、問題点を見つけ出し、その解決策は、自分達で作らなければならない時代になりつつあるからです。社会の要請に応えるべく、各大学も入学者選抜の方法も変わろうとしています。

る、というのが現状です。大学入試が変われば、高校の授業も当然変わらなくてはなりません。本校進路指導部としても時代の流れに遅れぬよう、情報収集に努め、思考力養成のための指導を今以上に研究していく所存です。

その一つの試みとして、今年度一学年では思考力を測るためにGPS(ベネッセ)という試験を導入しました。今後その意義や今後の指導への還元などを全職員で話し合っていければと考えております。

進路指導部長
寺田 義弘(高40回)

PTA主催講演会



担任)、大野孝之先生(同副担任)、持丸修一先生(同日本史担当)に出席いただきました。講演の前に控え室で齋藤氏と先生方が談笑する姿がとても印象的で、一気に三十余年前に遡ったような場面でした。さらに、齋藤氏が講演前の準備として発声練習を約三十分行っていました。アウンサーの方々が見えないところでどのような努力をされているか垣間見ることができました。

平成二十九年九月一日(金)に龍ヶ崎市文化会館において、(株)TBSテレビアナウンサー、齋藤哲也氏による講演会を開催しました。齋藤氏は本校を卒業後、早稲田大学に進学し、一九八九年四月、TBSにアナウンサーとして入社、一九九六年の番組開始当初から出演した『はなまるマーケット』で人気を博し、現在は『ひるおび』に出演中です。

今回の講演会は、PTA本部役員から卒業生で知名度の高い齋藤氏に講演を依頼したいとの提案から始まりました。昨年の五月、私が齋藤氏と三年生の時にクラスメートであったことから、講演依頼をしたところ、快く講演を引き受けて下さいました。しかし、日程が合わず昨年は実現出来ませんでした。

講演会は日程、会場等の関係で在校生を対象に行いましたが、来賓として龍ヶ崎市長の中山一生様、白幡同窓会会長の染谷信洋先生、白幡同窓会前会長の齋藤佳郎先生(三年次

講演会の内容は、演題を「コトバのハナシ」として、高校時代のエピソードやアナウンサーの心構えなどユーモアある語り口で進められました。特に「ら抜き言葉」の対応方法は明快で分かりやすい説明でした。パワーポイントを使用した進行でしたが、生徒達に興味を抱かせる演出方法もあり、今後、生徒がパワーポイントを使用する際の参考になると思えました。

講演会の日程調整をしていた今年五月、高35回生の同窓会があり、私も含め多くの友人が齋藤氏と会えるのを楽しみにしていました。残念ながら叶いませんでした。しかし、私から講演会の打ち合わせと併せて同窓会のビデオを渡したところ齋藤氏は大変喜んでいました。ご協力いただいた方々にお礼申し上げます。私達同窓生の多くは、普段テレビで齋藤氏の活躍を見て勇気をもらっています。しかし、齋藤氏には同窓生の情報がなかなか届かない状況で

部活動状況

射撃部

顧問 出雲 辰雄



六月に神奈川県伊勢原市で関東高等学校ライフル射撃選手権大会が開催されました。

団体戦においては女子(三年渡邊・川村・松村)が準優勝の好成績を収めることが出来ました。男子団体戦は残念ながら五位の結果となり、全国大会でのリベンジを誓いました。そして、迎えた夏の全国大会(広島県安芸太田町のつづがライフル射撃場)では男子団体戦において全国第三位の成績を収めることが出来ました。また、男子個人戦においては、ハイレベルなファイナル競技の結果、二年の宮本凱が全国第三位となりました。

今回の経験を糧に今後の大会に臨みたいと思います。最後になります。学校・同窓会をはじめ、PTA、OB、OG、保護者の方々のご支援いつも感謝しております。今後ともよろしくお願ひ致します。



「感謝」

射撃部三年 高木 薫



高校一年生から始まった射撃人生を振り返ると、改めて、たくさんの人の支援があつてこそ、全国制覇や国際大会出場という素晴らしい経験ができたのだと思います。

部活動をやるからには全国大会で活躍したいと思い、全国大会で良い結果を残している射撃部への入部を決めました。入部すると毎日の部活動が本当に楽しく、記録を伸ばそうと練習に打ち込んでいました。日々の練習を通して、自分一人で競技力を向上させるには限界がありました。が、周りには色々な事を教えてくだ

さる先輩や指導者の方々がいって、単純動作の繰り返しの中に詰まった技術やメンタルを磨くことを助けてくださいました。

そして、高校の部活動最後の試合である「笑顔つなぐえひめ国体」を迎えました。優勝以外は全く考えておらず、自分のために、茨城県のために、そして今まで支えてくださった方々への恩返しをするために、絶対勝つて帰ろうという思いで挑みました。予選は三位で通過し、決勝戦は途中で独走状態でした。しかし、二十二発目に大きくはずし、二位の選手との点差が〇一点にまで縮まってしまいました。その時、私は「ここで負けたら自分じゃない。優勝するのは必ず自分だ」と自分に言い聞かせ、冷静に残り二発を撃ち切り、優勝することができました。その瞬間、ホッと自分がいて、少しはプレッシャーがかかって不安になっていた部分もあったのかなと思えました。そして、私を支えてくださった方々から「おめでとう、演出が上手だね」などと祝福され、母には「自慢の娘」とも言われ、本当に嬉しかったのと同時に感謝の気持ちで一杯でした。

これからは、エアピストルに切り換え、オリンピックを目標に、たくさんの人が応援してください。皆さんの感謝を忘れず、更なる私の活躍を恩として返せる日を目指して頑張りたいと思います。

最後に、私の射撃人生全てのきつかけとなった竜ヶ崎第一高校に感謝申し上げます。

軽音部

顧問 高野 陽輔

本校軽音楽部は年間五回の演奏会と様々なコンテストを目標に毎日練習に励んでいます。茨城県ではまだ公式戦がないものの、土浦・下妻・下館(現・筑西)で行われたコンテストでは優勝、関西で四十年近い歴史を持つコンテストの第二回関東大会では選考員特別賞を頂くなどの結果を残すことができました。

さて、近年高等学校における軽音楽部の活動が活発化しています。例えば「文化部のインターハイ」とも呼ばれる全国高等学校総合文化祭では昨年度に引き続き今年度も軽音楽部門が開催され、次年度の開催も決まっています。これは「ロックは不良」というかつてのイメージが払拭され、全国的に軽音楽部が「部活動」として浸透してきたことの現れだと考えています。本校生徒も軽音楽を通してプレゼンテーション能力やコミュニケーション能力、豊かな感性、計画性など様々な力を成長させていきます。このような充実した活動ができるのも、皆様のおかげであると感謝しております。今後ともご指導のほどよろしく申し上げます。



定時制保健講話

定時制 養護助教諭

久保 美津

十月十八日(水)産

婦人科医の陳央仁先生をお招きし、保健講話を行いました。



陳先生は龍ヶ崎済生会病院に勤務される傍ら、若年妊娠、中絶防止を含めた性教育の啓発活動にご尽力されています。子どもから大人まで幅広い年代に向けて命の大切さを中心に、生と性のあり方について講演を通して伝えられています。

本校では、講演の初めに、事前アンケートで六割弱の生徒が自分のことが好きではないといった残念な結果であったため、今回の講演を通して少しでも多くの生徒が自分を好きと言えるようになってもらいたい、今こころの自分は奇跡の結果存在していることを理解してもらいたいと話されています。また、本当に愛し愛される相手ができて、お互いに責任を持てるようになるまで自分を大切にす

よう熱心に語りかけ、生徒たちも静かにしっかりと講演を聞いていました。講演後の感想にも、「講演を聞いて良かった」「自分も相手もいのちは大切」など多くの感想を寄せられ、改めて心の性教育の大切さを実感しました。

進路ガイダンス

定時制教諭 屋貝 直也

七月十四日(金)、定時制ではキャリア教育の一環として進路ガイダンスを実施しました。生徒は、事前の希望調査に基づいて「大学コース」「専門学校コース」「就職コース」に分かれ、それぞれの担当講師より進学後の学習内容や学生生活、入試情報などを説明していただき、実践的な面接指導も行っていました。

「リアルな話を聞いてもっと知りたくなった」「就職活動のことや面接のポイントがよくわかった」などの感想も聞かれ、生徒達の多くが真剣に取り組み、自分の進路について考えていました。



生活体験発表大会

定時制教諭 吉野 健太

平成二十九年度茨城県高等学校校定時制通信制生徒生活体験発表大会が、十月七日(土)につくば市ふれあいプラザで開催されました。生活体験発表大会は、定時制通信制に学ぶ生徒が定時制及び通信制高校に通いながらの生活を通して、感じ学んだ貴重な体験を発表し多くの人に感動と励ましを与えることを目的として、長年にわたって実施されている行事です。今年の参加校は十五校、発表生徒は十八名でした。

本校からは三年生の黒澤義男君が「働きながら考えたこと」というタイトルで参加しました。定時制に通いながら昼間アルバイトをしているその仕事の中で感じた、郷土への関心のあり方、また自分の今までの地元への関わりかた、これからの自身の希望など感じたことを発表しました。

四年制大学の受験準備との並行作業で練習時間がほとんどとれませんでした。しかし、少ない時間ながらも心を込めてしっかりと伝えるために、暗唱や表現の工夫など練習を重ねました。

大会では緊張しながらも、練習の成果を十分に発揮して、説得力のある素晴らしい発表をする事ができました。残念ながら全国大会への進出はなりませんでしたが、聴衆を惹きつける発表になりました。奨励賞をいただきました。ご支援くださったPTAおよび同窓会の皆様に感謝申し上げます。ありがとうございました。



編集後記

今回は「同窓会便り」の寄稿が増えたため、同窓会の紙面を1ページ増やしました。各学年同窓会の活性化の賜とうれしく思います。

また、今回から「協力金」のご支援をいただいた方々の『協力金納入者芳名簿』を作成し、会報とともにお届けする事になりました。今後とも同窓会活動につきまして、ご理解とご協力をお願い申し上げます。

倉持 正男(高27回)